



《特集》

(2013.3.21 発行)

第2回アーチルセミナーから 発達障害児者支援の最前線

《かけはし》

ママたちのほっとスペース
どんぐりころころがはじまりました!

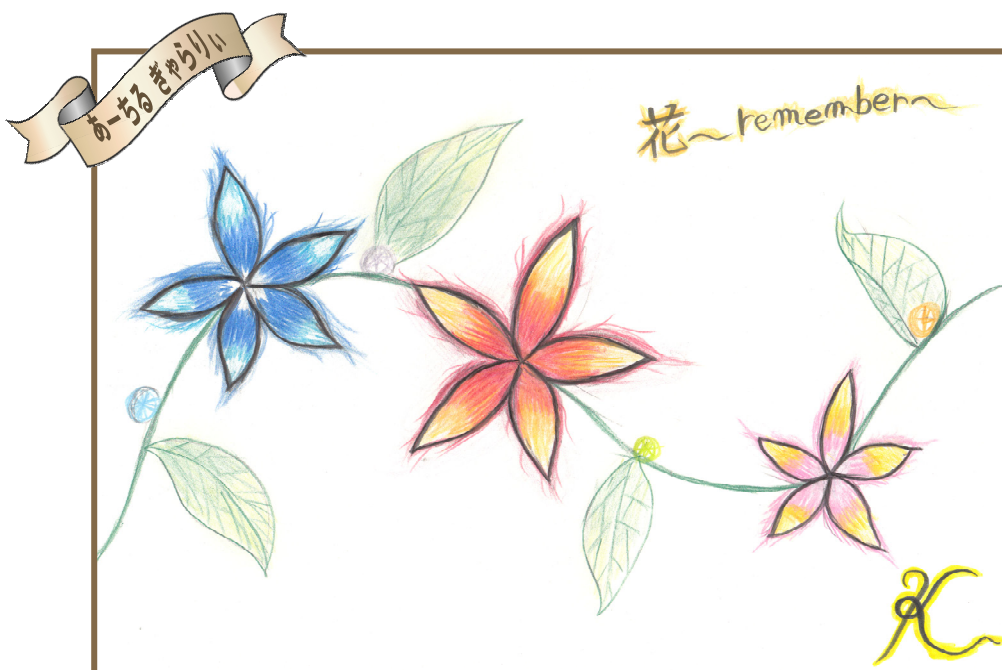
■ ともに歩む

春陽麗和の好季節がまもなくです。この4月、『障害者総合支援法』施行となります。この法律では、基本理念として「法に基づく日常生活・社会生活の支援が、共生社会を実現するため、社会参加の機会の確保及び地域社会における共生、社会的障壁の除去に資するよう、総合的かつ計画的に行われること」を掲げています。また、仙台市では平成24年度を初年度とする現行の『仙台市障害者保健福祉計画』で、前計画までの基本理念「完全参加と平等」「ノーマライゼーション」「リハビリテーション」とこれまでの本市施策の取り組み状況や現状及び課題等をふまえ、新たに「共生の都」・「共生する社会」を理念に掲げました。法律と本市計画の両方に「共生」が共通しています。

発達障害の概念が広がり、社会的に認知度が上がり、また、少子高齢社会や情報社会の進展等社会情勢の動向にも少なからず影響を受けながら、今後においても支援ニーズの多様化・複雑化が進むことが予想されます。その中、共生社会に向かってアーチルが担う役割や機能はどうあったらいいのか。アーチル開設から10年を経て、2館体制になった今、皆様と築いてきた10年間の足跡をふまえ、時の変化に対応するだけでなく、未来を切り開く新しい視点も大事にしながら、これからの10年を見通しての展望（ビジョン）を見出してまいりたいと考えています。ビジョンを明かりとして、希望や共感を抱きながら、ともに歩んでいけることを望みます。

今回の『ちえなっぷ』では、平成24年度第2回アーチル療育セミナーの内容を特集でお伝えします。講話での、「自律」や「合意」、「戦略」等は、ビジョンを考えるにあたって大いに参考になるのではないかと思います。

南部アーチル所長 佐久間 幸一



作品名

「花 ~ Remember ~」

しょうじ くれは
庄子 紅悠さん作

(作者のコメント)

大切な人との思い出が凝縮された絵です。
「ずっと大切な人とつながっていたい」という私の思いです。

特集

発達障害児者支援の最前線

† 発達障害児者支援の今後の展望 †



平成 25 年 2 月 11 日 今年度、第 2 回目となるアーチル療育セミナーでは、発達障害の捉え方の広がりに関する世界的な動向を踏まえ、発達障害のある方々の支援をどのように考え、支援のシステムづくりを進めていくべきかをテーマに、お二人の先生をお招きしました。

セミナー当日は講演とあわせて、今 公弥先生(アーチル嘱託医)のコーディネートで、本田先生、岡田先生との意見交換も行いました。

今後の仙台市における発達障害児者支援システムの整備・発展を考えるうえで、非常に参考となるご意見を拝承させていただきました。

1 「予防的観点」の必要性

(今先生) 自閉症スペクトラムの特性のある方が増えており、支援機関の整備に伴って、全国的に成人の相談件数も増加している現状を踏まえ、その対応を考えるなかで、保護者だけでなく支援者も発想の「コペルニクスの転換」が必要だとお話いただきました。

本田先生の「自閉症スペクトラムの特性を持っていることが、必ずしも障害につながる」という考え方は、非常に大事だと思います。

早期発見で二次障害を予防する観点と、いじめの対策など学齢期で多くなる問題を起こしにくくするような環境整備が必要だと感じました。

(本田先生) 予防医学的な観点での話になりますが、例えば、虫歯になりやすい体質が分かるのであれば、歯磨きの習慣などを伝えることで予防するのに越したことはないと思います。発達障害の特性の薄い群の方々については、どのように考えていくべきではないでしょうか。

(岡田先生) 財源や人材の確保が厳しい状況の中、地域において彼らの多様性を受け止められる体制を作ることが、大きな戦略になると思います。地域が多様性を許容するということは、障害として認識しなくても済むという見方もできます。「違っている、悪いわけではない」という見方ができるようになればと思います。

(今先生) 子育てに対する考え方が、もう少し柔軟性を持っていたり、子ども達の様々な違いを認めて育ち方・育て方を支援できるなら、「自閉症スペクトラムの特性があっても、生活の障害につながらない生き方」を支える環境づくりになると思います。

次に、支援における医師の役割などについてどのように考えているか教えてください。

2 支援におけるスペシャリティ

(本田先生) 私自身、医師という立場では、子どもを観察する目や、なんらかの技術が優れているということよりも、もっと総合的な判断力が要求されていると思います。ある局面で「こういう風にしましょう」という判断ができるよう、なるべく広い見方をする立場を心がけるようにしています。診療という形で担当者と同席しながら、全体を見据えて、支援の流れを見て方向を定める役割だと思います。

(岡田先生) 医師以外の職種であっても、きちんと発達障害に取り組める人であれば、本田先生の言われるような役割を担える可能性はあると思います。医師も専門職も各々のスペシャリティを持っていますが、職種を越えたところで発達障害に対するスペシャリティを持つことが必要だと考えます。

3 成人期からのフィードバック

(今先生) 本田先生が講演のなかで「発達特性が無くなるわけではなく、これを持ち続けて成長していくだろう」と、保護者に伝えることで、先の道が見えて来ると言われていました。

現在、成人期の支援で見られている課題を、乳幼児期や学齢期を支援するうえで分かっておくことも、重要な要素になると思います。

(本田先生) 私の所属するセンターでは、幼児・学齢・成人で支援チームを編成していますが、幼児のチームでも成人のケースを持つようにするなど、チーム間を越えて他の領域の支援経験やスタッフ間の交流ができるようにしています。また、1人のケースを2人で担当することで、職員に経験を積ませるだけでなく、「担当が替わって1からやり直し」ということにならないようにしています。

(岡田先生) 私たちのセンターも、基本的には本田先生の所と同じ体制で支援しています。

私は小児科医なので、元々は幼児を中心に支援していましたが、成人の方を支援するようになって、見方が変わるようになりました。支援者として、成人期から学ぶことは、とても重要なことだと思います。

4 発達障害児者支援の今後

(本田先生) 1つの方向に偏るのではなく、2つの対立的な考え方を併せ持つことが大事だと思います。「インクルージョン」と「仲間づくり」の両立が、今後の方向性の1つではないでしょうか。

講師紹介



児童精神科医
本田 秀夫 氏

山梨県立こころの発達総合支援センター所長

東京大学医学部医学科卒業。
東京大学附属病院精神神経科、国立精神・神経センター武蔵病院精神科を経て、1991年に横浜市総合リハビリテーションセンター発達精神科に勤務。
2011年より現職。
山梨県中央児童相談所副所長も兼務。



小児科医
岡田 祐輔 氏

静岡県こども家庭相談センター総合支援部長
(発達障害者支援センターの長に相当)

筑波大学医学専門学群卒業。
東京小児療育病院、茨城県立医療大学などを経て、2003年ノースカロライナ大学 TEACCH 部インターン、2004年に西多摩療育支援センター診療所長、翌年、副センター長に着任。
2008年4月より現職。

5 まとめ(セミナーを振り返って)

(今先生) 仙台市における発達障害児者支援を今後どのように展開していくべきか?その方向性を探ることが今回のセミナーの企画主旨の1つだったと思います。

本田先生からは、自閉症スペクトラムの特性を中心とする当事者の考え方や感じ方、そこにもどのように支援していくべきかということをお話いただきました。

彼らが社会参加していくうえで、自己肯定感を持ちながら、自分のできること・できないことを知る【自律スキル】と、社会的なルールを守り、他者に相談することができる【ソーシャルスキル】を学ぶことが必要だということ。

そして、その学び方や覚え方、教育の仕方、環境づくりも含めて、多数派とは違う経験ではあっても、ある意味では同じことをしていくという発想を持つことの大切さを感じました。

また、岡田先生からは、少ない支援者で多くの課題に取り組むうえで、【戦略】を持つて臨むことの重要性をお話いただきました。

仙台市においても、必要な方々に支援がより有効に行き届くよう戦略を考えたいうえで、他機関との連携・協働を進めていきたいと思います。

どのような支援システムを構築しても、そこから漏れてしまう方に対する目を持つことと同時に、自閉症スペクトラムの特性のある方々は、他者に相談することが得意でないことが多いので、小さい頃から「他者に相談することで上手くいった」という経験を、どのように支援していくかが大切だと感じました。

本日は、大変示唆に富んだお話をいただき、ありがとうございました。

「インクルージョン」とは、全ての人が障害の有無などを問わず、同じ場所で生活できる環境づくりという意味ですが、「皆一緒にいればそれで良い」というのではなく、「自閉症スペクトラムの方々が個別の教育プログラム等の配慮を受けながら、皆と一緒にやっていくことは十分可能である」という意味です。そうした環境整備が重要だと考えます。

もう一方で、少数派である彼らの権利を守ると考えたときに、共通の感性や興味を持つ「仲間」を得ていくことも必要でしょう。

皆と一緒に生活できるけれども、少数の気の合う仲間も必要。その両方の環境をつくるのがテーマだと思います。

(岡田先生) 相談機関が増えれば、多様なニーズの掘り起こしも進みます。単独の機関で全て対応していくのは難しく、仮にそうした支援モデルを構築しても、対応できないニーズが必ず出てきます。そこをどうサポートしていくかを考えていく必要があります。

成人の就労支援など多様化する支援ニーズには複数の支援機関が必要で、それらの機関をコーディネートし、支援を整理していくために発達障害者支援センターが機能すべきなのだと考えます。

自閉症スペクトラムの特性のある方々は、そうではない多数派の社会のなかで、どういう風に生きていくべきかを学ばないといけないこともあるかもしれません。

しかし、逆に多数派が少数派から学ばなければいけないこともあると思います。例えば、教育の場などでも、発達障害の特性ゆえに学び方や教え方が違うので、皆と同じでは上手くいかない。彼らに合わせたやり方を確立し、そして認めていくことが必要なのだと思います。



「アーチル」とは「アーチ (arch: 橋)」と「パル (pal: 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。
このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思います。



自らの子育て体験を、後輩の母親に伝えることで、母親による保護者支援を目的としたグループ「お母さんの部屋 “まるん”」は、平成 17 年から北部アーチルで活動を続けています。

平成 24 年 南部アーチルが開所したことで、保護者からは「南部アーチルでもお母さんの部屋が欲しい」と、より身近な場所での交流を望む声があがりました。

“まるん”メンバーからの熱いエールもあり、南部アーチルの「初期療育グループ」で、先輩お母さんとして参加しているお母さん達によって、平成 24 年 11 月「ママたちのほっとスペース “どんぐりころころ”」は誕生しました。

私たちもできる範囲で、同じお母さんとしてやれることをやってみよう!



私たち最初にアーチルに来た頃、
どうしてたかな・・・

自分がパニック状態!
どうしよう!! って混乱していた(x)

「教えてもらおう」って
アーチルに行ったけれど、
あの当時求めていた答えはなくて
もやもやしていた。。

ほかの子と同じように
おもちゃを使えるように教えようと
していたら、先輩のお母さんが
「その遊び方でいいじゃない」
って言ってくれた(^)

ほかのお母さんに会って、
「自分ひとりじゃない」と知って
安心した。先輩お母さんの話を聞いて
「このままでいいんだ」って思えて、
力が抜けて楽になった。
… そんな出会いの場になればいいよね。

「どんぐりころころ」の由来って?

♪どんぐりころころ・・・♪

お池にはまってさあ大変!
泣いてはドジョウを困らせたー



「大変なこともあるけれど、いろいろな人に支えてもらいながら、成長していくといいな～(*-*)」と、願いを込めて… ネーミングしました!

お気軽にお問い合わせください

- * 開催場所 *
南部アーチル 2 階研修室
- * 開催日 *
原則、第 2 木曜日と第 4 火曜日
- * 時間 *
10 時 30 分 ~ 12 時 30 分
- * お問い合わせ先 *
南部アーチル TEL247-3801



* 「お母さんの部屋 まろん」のお問い合わせは、
北部アーチルまで TEL375-0110

この広報紙の
お問い合わせ先

(発行元) 仙台市北部発達相談支援センター
〒981-3133
仙台市泉区泉中央2丁目24-1

TEL:022-375-0110 FAX:022-375-0142
e-mail:fuk005410@city.sendai.jp
ホームページは→

アーチルで 検索